

Title	<紹介>Reginald George Golledge and Robert J. Stimson, Analytical Behavioural Geography
Author(s)	小長谷, 一之
Citation	史林 = THE SHIRIN or the JOURNAL OF HISTORY (1988), 71(2): 327-328
Issue Date	1988-03-01
URL	https://doi.org/10.14989/shirin_71_327
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

紹介

Reginald George Colledge and
Robert J. Stimson,

Analytical Behavioural Geography

一九五〇年代のいわゆる計量地理学への、「体制内変革」として登場した行動地理学も、一九八〇年代に入り、これまでの成果の中の多岐に亘るテーマを結び付け統合して行く総決算の段階を迎えたと思われる。

当初の運動を支えていた旗手達の内にラディカル地理学・人文主義地理学等へと鞍替えるものも現れる一方で、筆者の一人であるカリフォルニア大学サンタバーバラ校地理学教授ゴレッジは、一貫して行動地理学の立場を堅持し続けて来ており、今や行動地理学の大御所的存在の一人と言っても過言では無いであろう。一方のスティムソンは、アデソードにおける居住地移動の研究で P. h. D を取り、現在キャンベラ教育大学の経営研究学部長を務めている。

そのゴレッジとスティムソンによりまとめられた本書は、題名にも示す如く彼らの主張する「分析的立場」に重点の置かれた、現時点での行動地理学の集大成的テキストの一つである。本書では、第一章（人文地理学における行動論的アプローチの発展）と最終章十三章（行動論的アプローチ別の道と将来の研究）の一部で、「ゴレッジらによる」行動地理学とは何か、それが如何なる立場に依拠するものなのか、が述べられる。

第一章で、行動地理学としてゴレッジらは、主に個人の空間行動 (spatial behaviour) を対象とし、人間の行動過程から、地理的現象を理解・説明しようという試みのこととして、考えている様に筆者には思われる。ここで、以下の諸特徴が存在する。

- ① 集計レベル (aggregation level) として個人から出発すること。
- ② 「空間における行動 (behaviour in space)」と「空間行動 (spatial behaviour)」とは異なること。
- ③ 「過程指向 (process orientated)」であること。
- ④ 実証主義的立場。以上①②③の点を特徴として一九五〇年代の計量地理学からの発展を目指した行動地理学が、計量

地理学から受け継いだのがこの側面である。この点、人文主義地理学が、同じ様に計量地理学への批判から出発し乍ら、実証主義の枠内では捉えきれない側面に積極的価値を見い出して行こうとしているのとは対照的である。既に述べた第一章の他に最終章第十三章では、こうした人文主義的アプローチ、マルクス主義的アプローチといった他のアプローチの立場も御印ばかりに触れられてはいるが、それらに就いては専門書を見るべきであろう。

寧ろ本書の白眉は、この種のテキストとしては殆ど初めてと思われる、行動地理学のデータ収集法に就いて独立した一章（第二章）が割かれていることであろう。この第二章（調査法に基づくデータ収集）は、一見極めて技術的に思われる。しかし上記①の様に、個人という集計レベルから出発する行動地理学では、既製の集計データを越える必要が多く、データの収集と信頼性の議論は、行動地理学の根幹に関わる重要な問題なのである。

本論である第三章から第十二章は大別すると二つ、より細かくは、更に二つずつ四つに分けられる。前半部第三章から第七

章では、特定の行動の種類に依らない、人間行動全般を捉える一般的な分析枠組みが論じられる。スリフト N. Thift によれば、行動地理学には個人の認知・選択・意志決定過程を重視する能動的アプローチと、社会的・時間的制約を重視する受動的アプローチの二系統が認められるが、この「能動的側面」に、第三章（知覚と態度）・第四章（空間認知）・第五章（学習と空間行動）が、「受動的側面」に、第六章（活動空間と行為空間）・七章（時間経路分析）が大略対応する。ゴレッジは本来能動的アプローチに立つ研究者とされて来たが、この様に受動的側面にも最近かなり注目する様になって来ており、両者が今後互いに補いあって発展すべきことを伺わせる。

後半部第八章から第十二章では、様々な種類の特定の行動に焦点が当てられ、消費者行動や通勤移動とつた、カレン I. Challen の「短期的行動」(short term behaviour)に、第八章（消費者行動）・九章（空間選択と活動パターン）移動モデル指向）が、また、居住地移動の様な「長期的行動」(long term behaviour)に、第十章（行動論的文脈における人口移

動）・第十一章（都市内部スケールでの居住地決定過程）・第十二章（住宅への欲求、住宅のストレス刺激、住宅探索行動）が概ね対応する。

こうした章立てでは、それ自身大きな意味を持つていると考えられる。今日の行動地理学研究が直面している大きな課題の一つとして、取り扱うテーマが多岐に亘り、全体を統合する枠組みが求められていることが挙げられるが、能動的アプローチと受動的アプローチ、短期的行動と長期的行動といった枠組みは、そうした統一的視座に関わって来ると考えられるからである。この様な立場から見れば、本書は、決して単に新奇なモデルやアプローチが羅列的に散りばめられた概説書というだけで無く、行動地理学全体を有機的に結び付けようとするゴレッジの意気込みが感じられる一冊といえる。

最後にやや技術的側面から、目新しい点を幾つか指摘して置きたい。①既に伝統の一つとなった認知・学習過程が第四・五章で論じられているが、ここでは人工知能研究と認知科学の最近の成果が取り入れられている。②第八章の消費者行動の研究史の

中で、ハフの果たした革新的役割が重視されている。③第八・九・十章等ではロジックモデルを中心とする非集計行動モデルが大幅に導入されている。このモデルについて詳しく述べる余裕は無いが、個人の効用に関する少数の簡単な仮定から導き出される、極めて普遍性の高いモデルであり、今後地理学の各方面での流行を予感させるものである。

以上、本書を、行動地理学が様々な問題を孕みながらも、隣接分野とダイナミックに交流しつつ活動する姿を概観する為の好著と考え、紹介の筆を執らせて戴いた。

(三四五頁 一九八七 Crown Helm, London)
(小長谷一之 京都大学大学院生)